

平成21年度研究チーム活動中間報告（第1回目）

「東アジアにおける戦争と絵画」

No.110 研究幹事：金泰虎（国際言語文化センター）

前近代の東アジアでは、個々の地域における戦はもとより、東アジア（日本・韓国・中国）を巻き込んだ戦争もあった。そこで、4人の研究者は上記のタイトルのもと、なぜこれらの戦争を絵画として描き残したのか、その絵画の意味合いやこの戦争が一般の絵画に与えた影響などについて、それぞれのテーマを設定して研究を進め、以下のような中間報告としてまとめた。

金泰虎のテーマは「前近代における日・韓・中を巻き込んだ戦争とその絵画」である。前近代において日・韓・中が共に関わった戦争とは、「文永・弘安の役」・「文禄・慶長の役」が取りあげられるが、これを題材にした絵画が残されている。まずは、これらの絵画の収集を行い、そして描かれている戦争の現場に足を運んで調査を行った。この絵画における戦争現場の描写を踏まえて、従来、歴史学や美術史学の視点で検証されてきた絵画資料を再吟味する。つまり、この戦争画は、描いたその目的によって戦争の意味合いや戦争画の解釈も異なり、違う方向性を示すと考えられる。この方向性に基づいて、戦争画をめぐる歴史学における戦争の意味合いや、美術史学における分類を見直して行く。

佐藤泰弘の研究は「蒙古襲来絵詞」である。この絵巻物については歴史学・美術史からの研究が蓄積されている。主要な先行研究の成果を確認するとともに、関連する研究文献や基本史料および複製本の収集に努めた。そのなかで歴史的事実としての蒙古襲来そのものだけでなく、蒙古襲来という事件が後の時代にどのように解釈され、受容されたかが研究課題となることに気付いた。蒙古襲来絵詞を、そのような歴史的事件の解釈史・受容史の中に位置付けることにより、従来とは異なる研究の可能性を探ってみたい。

趙ギュヒは「文禄・慶長の役以降における朝鮮士大夫の文化認識と絵画」である。朝鮮王朝が建国されて約300年間は、戦争が皆無の時代であった。その中で、突発的に起こった「文禄・慶長の役」は、朝鮮士大夫（貴族層）の認識に大きな影響を与え、また絵画にも反映された。特に、文人画を中心にその絵画を網羅して、戦争の記憶や認識がいかにか表現され、また後の時代に繋がっているのかの分析を試みる。「文禄・慶長の役」が絵画に与えた影響を美術史の1つのジャンルとして位置づけたい。

李須恵は「文禄・慶長の役以降に朝鮮から来日した凶画署画員の絵画」である。「文禄・慶長の役」以降の、朝鮮からの使節をもって、とりわけ「朝鮮通信使」という。この使節に同行した絵描き師（画員）に着目して分析を進めるが、この絵描き師の絵画についての先行研究はないに等しい。そこで、まず「朝鮮通信使」に同行した絵描き師の残した絵画の収集を行った。その中でも、なかんずく交流の中で金明国という絵描き師が残した絵画に注目して分析を行うことにする。